

over & across,
collectivism in the Indonesian art field,
galerikertas studiohanafi

Sunday, January 18 2026

by Rizki Asasi

ご挨拶

私の名前はリズキ・アサシです。キキと呼んでください。
ギャラリー・クルタス、スタジオ・ハナフィでキュレーター兼プログラムマネージャーとして働いています。
また、2024年からは、バンドン工科大学で美術キュレーションとマネジメントの修士号取得を目指しています。
ギャラリー・カルタス、スタジオ・ハナフィでの業務に加え、バンドンとジャカルタでインディペンデント・キュレーターとしても活動しています。
皆さん、はじめまして。そして、このような機会をいただき、ありがとうございます！



Over & Across 準備:2025年7月上旬

- 奈津子さんの展覧会の準備は、2023年という早い時期から話し合いを始め、2025年半ばに本格的に始めました。
- この頃、奈津子さんはバティックを使った最近の実験について私たちに話してくれました。そして、7月上旬に彼女の自宅兼スタジオで、私たちはそれらを実際に見ることができました。
- その次の訪問とそこでの会話は、奈津子さんにとってこれまでとは異なる手法や制作方法であるバティックがに彼女にとってどのような新しい芸術体験になったのか、についてフォーカスしたものになりました。



dari kunjungan tim @galerikertas_art ke studionya @tanakanatsuko_works hari ini. Thanks for the good food, good company, and even better art. Sampai ketemu lagi di galeri.♥



Over & Across exhibition prep



Over & Across opening

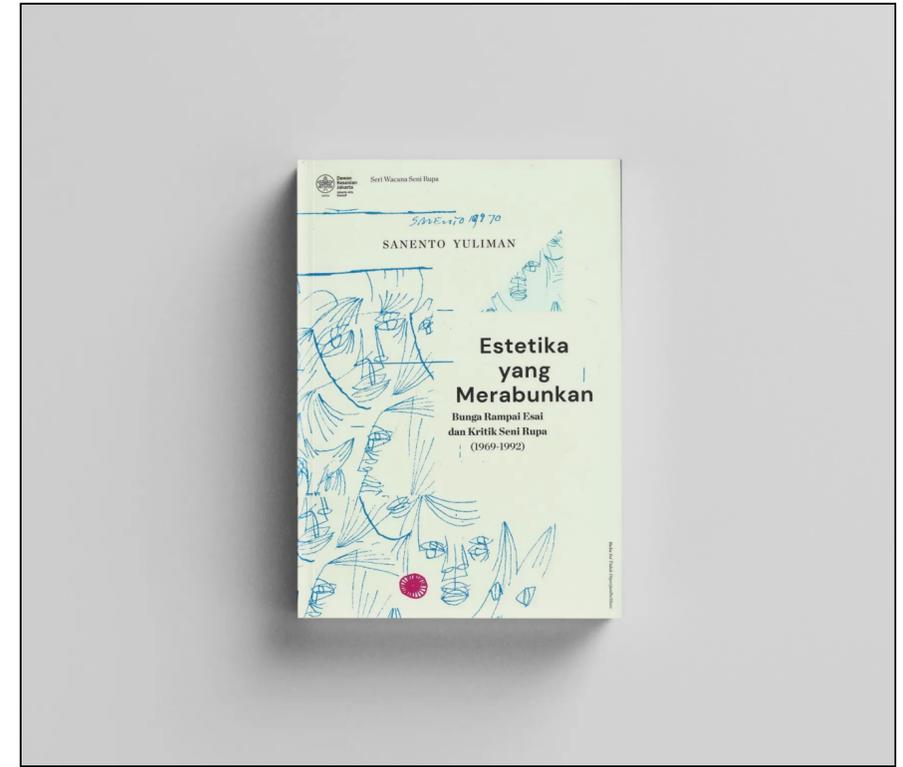




Over & Acrossは、「文化交流や伝統的な芸術活動に関する企画」という視点から離れ、アーティストが自分にとってやりやすい方法論から抜け出し、新しい制作方法に挑戦する意欲から生まれる芸術形態を称賛することに重点を置くようになりました。

奈津子にとってのバティックは、まさにこうした斬新さを象徴しています。

バティック以外にも、奈津子はインドネシア独自のアーティスト・コレクティブ主義/潮流に基づいた「手法」にも触れました。



「サンガル」と呼ばれる一種のコレクティブは、インドネシアの美術史において今日まで重要な役割を果たしてきました。美術評論家のサンエント・ユリマンは、サンガルの成功と魅力は、美術学校のモデルに失望していた若いアーティストたちに、理想主義と包摂性を提供したためだと指摘しました。

近年、ウラン・ディルガントロとキキ・リズキー・ソエティスナ・プトリは、インドネシアにおける現在の脱植民地化の取り組みを踏まえてユリマンの著作を再検証し、サンガルのケースは、今日なお存在する植民地主義／西洋の制度的枠組みに代わるものであるだけでなく、コレクティブと芸術制作のための一連の「連帯感、必要性、そして地域主体性に根ざした」戦略を提供してきたと結論付けました。

このコレクティブの精神は、インドネシアの多くの芸術・文化団体に息づいています。

これらの団体は、自らをサンガルと明確に称してはおりませんが、同じ価値観と信念を支持しています。ギャラリー・クルタスもそのような組織の一つです。



スタジオ・ハナフィは1999年に抽象画家のハナフィのプライベートスタジオとして始まりました。

このスタジオは川沿いの森林エリアにあります。彼はこの環境から多大なインスピレーションを受け取ると同時に、その環境を人々と共有しようとしてきました。

そこからスタジオ・ハナフィは視覚芸術だけでなく音響芸術やパフォーマンスアートの育成にも力を入れる世になりました。そうした活動の一部に、平面表現や継続的な芸術の実践に注力している多目的なスペース、ギャラリー・クルタスもあります。



あらゆる世代のアーティストへ教育の面とプロモーションの面から機会を提供するという目的のもと、スタジオ・ハナフィが運営するギャラリー・クルタスは、紙を媒体とした芸術表現に注力しています。私たちの考える紙とは、素材としてだけでなく、無限の創造的可能性を秘めた器です。

2018年から、ギャラリークルタスはウゴ・ウントロ、セシル・マリアーニ、イラワン・カルセノ、ファルハン・シキ、ハナフィ等のアーティストの作品を紹介してきました。

展覧会においては、彼らはレジデンス・プログラムを通して自身の知識や体験を、若い世代のアーティストたちへと伝える役目もこなしています。この若いアーティストたちもまた、プログラムの一部として選抜され自身の展覧会をギャラリー・クルタスで行いました。

近年の活動



2020年、私たちはパンデミックの影響でギャラリークルタスの全ての活動を一度停止することになりました。活動の一部を再開する際には、来場者の安全を確保するために、すべての安全基準を見直す必要がありました。そうして私たちはハナフィによる作品と壁画の展覧会「スタジオ内の60年」を開催することが出来ました。この展覧会ではソーシャルディスタンスと来場者規制の元行われました。この展覧会は非常に高い評価を得、Tempoを始めとするインドネシア国内の主要メディアでも取り上げられました。

「スタジオ内の60年」の「第二部」として、ハナフィが自ら選んだ三人の若手アーティストを、スタジオ・ハナフィでのアーティストインレジデンス企画へ招聘しました。一カ月に及ぶワークショップの間に、ハナフィは「スタジオ内の60年」での自身の作品の背後にあるインスピレーションをさらに掘り下げました。このインスピレーションには、パンデミック下に経験したショックと恐怖(特にたった一日で世界が変わってしまうその恐るべき速度)を捉えようとする彼の試みが中心にありした。

下の写真は、若手アーティストの一人(ヴィッキー・サプトウラ)がハナフィと共に制作にあたる姿です。



2021年のインドネシアでの悪化するCOVIDの状況からの影響による休止を経て、2022年にギャラリー・クルタスは再開後初の展覧会を行いました。この展覧会はストリートアーティストのエディ・ボネツキの「オンデル-オンデル：地方と都市」です。この展覧会はますます高級化が進むジャカルタにける伝統的なオンデル・オンデルのバタウィ像に関する文化的な分布の調査に基づいたものであり、インドネシアにおける都市化の弊害の反映として捉えたものでした。

スタジオ・ハナフィでのレジデンスプログラムのフォーマットに従って、エディ・ボネツキは更に七人の若手アーティストを選び、ギャラリー・クルタスでのグループ展を開催しました。このグループ展のタイトルは「再構築(リコンストラクション)」と参加者の人数から「リコンストラクト7」とされました。この展覧会では恐怖、侵入、伝統といった同じアイデアが繰り返されると同時に、作家自身の個人的な経験がそこに組み合され、挑発的な壁画やインスタレーションが生まれました。



2022年の三回目では、写実画家/造形画家のエンドロ・ルクモノによる展覧会を開催しました。タイトルの「コロ・ングタル・ブラン」はジャワの都市伝説(日食に関連するものとそれがどのように悪い前兆と認識されるか)から取られたものです。

ルクモノはこの破滅の前兆を、現在のポスト・パンデミックの世界と結びつけることを試み、また、恐怖と迷信がいかに関社会に出現するかを探ることを試みました。

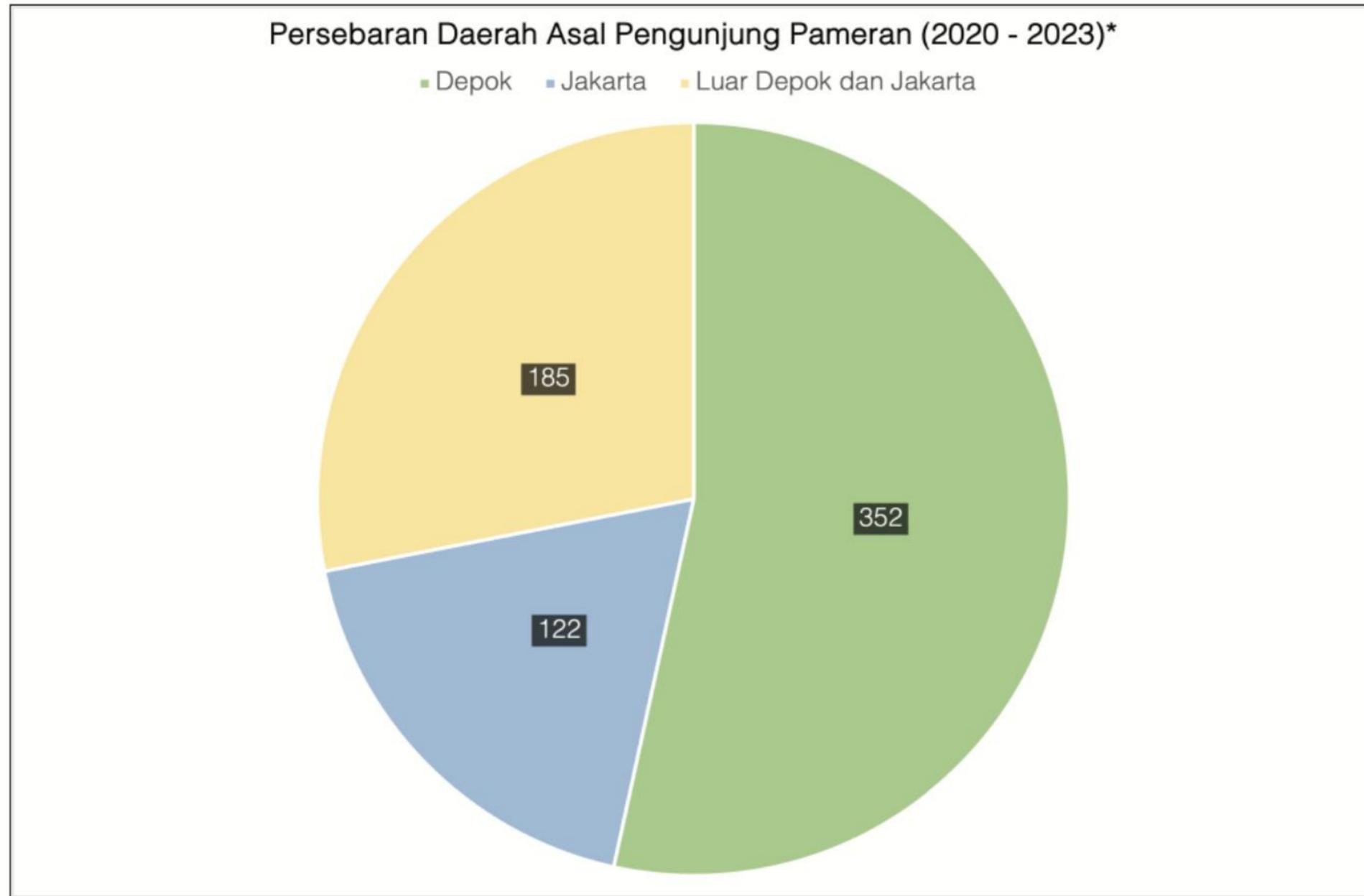
これらの恐怖と迷信のテーマは、2022年の四回目の展覧会に引き継がれました。この四回目の展覧会にも、ルクモノが指導する若手アーティストが参加しています。以前の「リコンストラクト7」と同様に、「katanya, katanya, katanya....」は、個人的な経験の要素を取り入れることで、前回の展覧会のアイデアをさらに精緻にしました。若いアーティストの一人は故郷の伝統的な収穫から、もう一人は大学キャンパスの建物に関する怪談話から、そして三人目は先天性欠損症から世界を違った見方で見るようになったことから、絵画を制作しました。



スタジオ・ハナフィでは、展覧会とアーティスト・イン・レジデンスプログラムだけでなく、デポックエリア近郊の教育者やアーティストによるワークショップも開催しています。これらのワークショップでは、ハナフィ自身が長年アシスタントを務める生徒と共に開催することもあります。

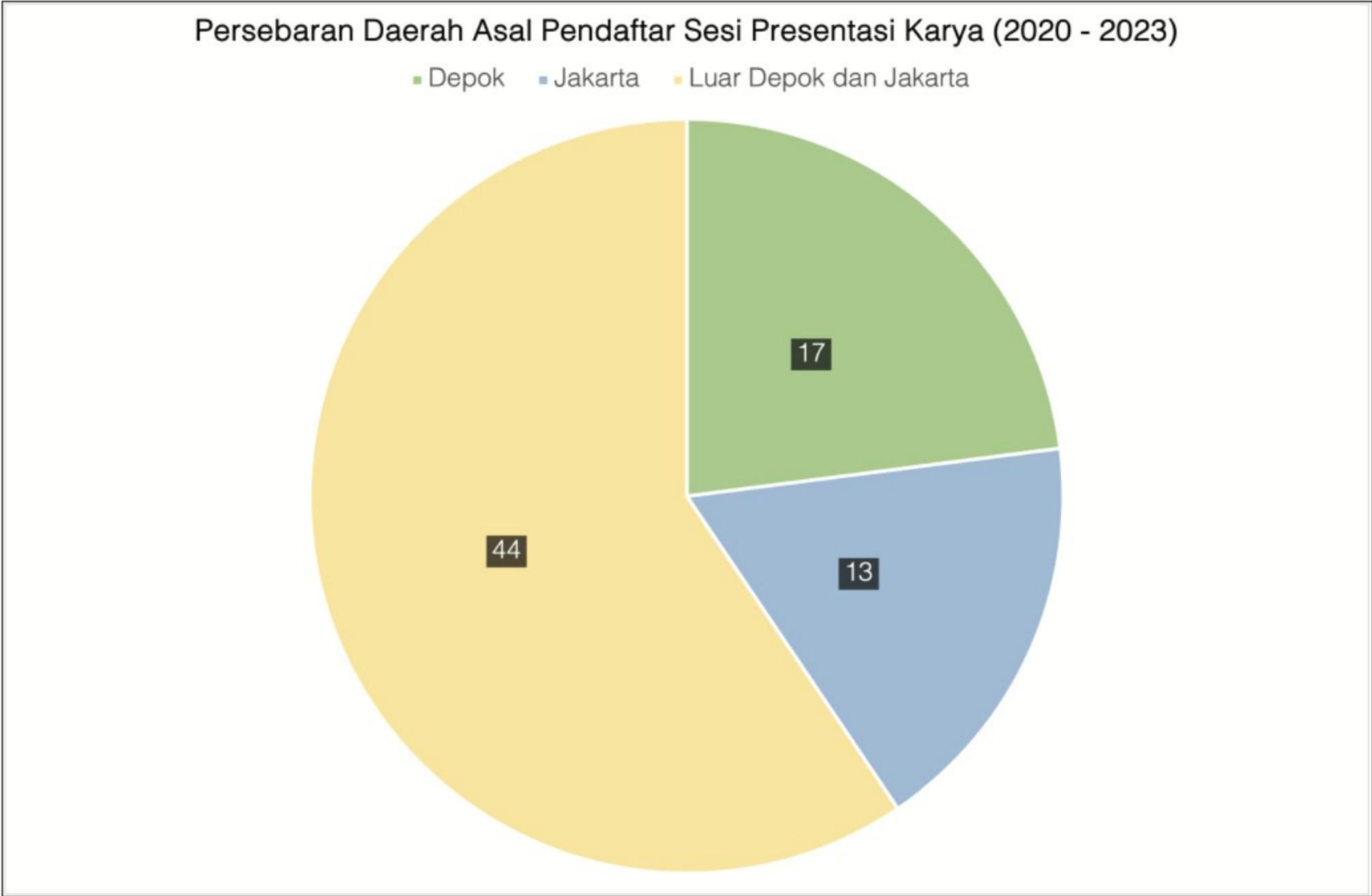
上の写真はBPKペナバル高等学校の美術教員による、2022年のワークショップの様です。

Galerikertas audience data collected in 2023.



*data daerah asal pengunjung untuk pameran "Katanya, Katanya, Katanya" tidak tersedia akibat kesalahan administrasi.

Galerikertas artist data collected in 2023.



TERIMA KASIH